

タイトル：士師記① 最初は良かったのに！

聖書箇所：士師記1章1～4節、21章25節

【そんな人じゃなかったのに】

皆さんは、日々誰かと接しながら人生を生きていると思います。その中で人と接しながら「この人はこんなに素晴らしい人だったのか」と感動を覚える時もあれば「こんな人じゃなかったのに」という失望を覚える時もあります。皆さんはそのような経験は無いでしょうか。人は完璧では無いので、人と接しているとそういうことはよく起こってくると思います。

私も今年、2度そのような事を経験しました(この教会の人では無いのでご心配なく)。ずっといい人だと思っていたのに、表の顔と裏の顔が違う時、自分に見せていた姿と自分が知らない、そうじゃない姿が違う時、若干のショックと裏切られたような思いをする時があります。しかし、だからといって、その人を指差して非難する・批判することはできません。私だって、そのような面があるからです。また、その人も最初からそうだった訳ではないはず。何かの出来事を通して、少しずつ変化・変質して、そのような思いになったのだと思います。牧会の現場ではそのようなことがよく起こるので、牧師の学校でもこのような言葉を学びました。カウンセリングの時間に教授がこう教えてくださいました。「人は期待するもんじゃなくて、愛する対象です」人に変に期待すると裏切られ、自分の思い通りにならないとガックリ来るものですが、人は自分の思い通りになると期待する存在ではなくて、どうなっても愛する対象ですとカウンセリングの先生は

教えてくださいました。

今回は、そんな最初からそうではありませんでしたが、様々な出来事を経験して、創造主から離れていく人々とそれを食い止めようとする人々の歩みが描かれた士師記というところから学んでみたいと思います。

【士師記の背景】

今日からしばらくの間、シリーズで学んでいく士師記もそのような人たちが記録されています。最初はそうではなかったのに、最後は、創造主を悲しませてしまう、そんな姿が記録された本です。詳しい話に進む前に、士師記の背景を学んでみましょう。士師記の一番最初にはこのような言葉が記録されています。

「ヨシュアの死後」つまり、イスラエルの民を導いてきたヨシュアが死んだ後の話だということが分かります。ヨシュアって誰だと思われる方もおられると思いますので、もう少し聖書の歴史を遡って考えてみましょう。

①聖書の歴史の復習



- 1) エデンの園(場所は不明)
- 2) ノアの箱船(アララテ山)
- 3) アブラハム(ウル→エジプト→カナン)
- 4) アブラハム・イサク・ヤコブ(カナン周辺)
- 5) ヨセフ(カナン→エジプトへ奴隷→首相になる・兄弟も定着)
- 6) モーセ(エジプトの奴隷→40年間の荒野→カナンの入り口)
- 7) ヨシュア(カナン入り口→カナンを征服途中→死亡)

そして、いよいよ士師記の時代に入ってくる訳です。

士師記の1章1節に「ヨシュアの死後」と書かれているように、ヨシュアが死んだ後、イスラエルの民がどのようになったかが士師記には記録されています。

【主の御心を伺う民】

今日は、1章1節では「ヨシュアの死後、イスラエルの民は、主の御心を伺ってこう言った。『どの部族がカナン人と戦うために出陣したら良いのでしょうか』と記録されています。士師記は一番最初のページで、今までイスラエルの民を指導してきたヨシュアの死を記録してスタートしています。この士師記を読むと、ヨシュアに続くリーダーは記録されていません。モーセやヨシュアと言った1人の偉大なリーダーは登場しないのです。士師という言葉は指導者とか救う者という意味ですが、1人の偉大な指導者の死後、それに続く指導者は現れませんでした。ゆえにこの後、士師と呼ばれる指導者が代わる代わるイスラエルの民を治めました。士師記の歴史の約410年もの間に約12人もの士師が建てられました。しかし、今日、私達が読んだ士師記の1章には、

まだその士師は登場してきていません。ヨシュアが死んで、士師が現れるまでの過渡期にあったわけです。ですから、士師記1章はヨシュアが死んだ直後の状態を示しています。偉大な指導者が死んだ後、イスラエルの民が何を始めたのかが記録されていました。1章1節では「主の御心を伺って」とあります。偉大な指導者は失いましたが、彼らの心の中には「主により頼む信仰」がありました。他の人間を探すのではなく、主により頼む人々がいました。主の導きを心から求める人々がいました。

【使命に生きる民】

そして彼らは創造主にこう伺っています1章1節後半です「どの部族がカナン人と戦うために出陣したらよいのでしょうか」実は、ヨシュアの時代に、カナンの地を全て征服した訳ではありませんでした。まだまだ征服すべき場所が残されていたのです。イスラエルの民がそれを知って、創造主に御心を求めているところを見ると、彼らは自分達の使命を忘れてはいませんでした。自分達が進むべきところがあり、偉大なヨシュアは死んだけれども、主に伺いを立てて進んでいく、信仰と使命感がありました。

【創造主の約束と結果】

創造主は、その信仰と使命感に応じて下さいました。2節です。「すると主はこう仰られた。『ユダ族が出陣しなさい。私は勝利を約束する』」イスラエルの民は、創造主に聞き従う決意を持って、創造主に伺いを立て、創造主が約束を持って応えてくださる…とても素晴らしい信仰の姿がありました。そして続いて3節

～4節を読んでみると、ユダ族は自分の領地に住んでいたシメオン族と一緒に出陣をしました。4節では「主が彼らをユダ族の手に渡されたので、カナン人とペリシ人一万人がベゼクで殺された」と記録されました。創造主の約束どおりに勝利を得たのです。

偉大な指導者ヨシュアが死にましたが、イスラエルの民は創造主の言葉に従って行けば、カナンも征服できるように思えました

【めいめい自分の目に良いと思われる事を行った】

しかし、この士師記の最後にはイスラエルの民の衝撃的な姿が結論のように、このようにまとめられています。士師記21章25節「この頃、イスラエルには王がなくめいめい自分の目に正しいと思う事を行っていたのである」この文章はイスラエルの民が、先ほど読んだ1章のように、創造主に伺い、創造主の良しとされる方法で主に従っていたという意味ではありません。創造主に伺うこともせず、そしてこの後、登場する士師にも従わず、自分勝手に自分の良かれと思われる方法で生きていたという事を意味しています。「めいめい自分の目に良いと思われる事を行った」自分が物事の判断の中心になってしまったイスラエルの民の墮落をはっきりと記録しました。士師記1章1節の「主に伺いを立てた」という言葉とは正反対の姿です。

最初はよかったのです。うまくやっていました。しかし、なぜイスラエルの民はこうなってしまったのでしょうか。

【墮落の原因】

それは、イスラエルの民が征服すべきカナンと妥協し始めたか

らでした。もっと具体的に言えば、カナンという場所やカナン人達が与える恐怖に怯え、カナンの文化に溺れていってしまったからでした。カナンに飲み込まれてしまったのです。

モーセの時代、カナンに12人の偵察部隊を送り込んだことがありました。これから攻めるカナンの地はどういう場所か探らせたのです。その12人のうち10人はカナンを否定的に評価しました。カナンには屈強な人々がおり、自分達には倒せなさそうに思えました。人間の目で判断した結果です。

また、カナンには偶像礼拝がありました。バアルやアシェラと言った偶像が拝まれていました。バアルやアシェラを信じる信仰は何の中身もなく儀式的なものでした。形だけの宗教だったのです。そして、その偶像は快樂と結びつき、性的不道徳をもたらしていました。またカナンの文化は自己中心的であり、貪欲な文化でした。自分の豊かさだけを追求する文化でした。

【妥協するイスラエル】

今の私たちが聞くと、あまり良さそうには聞こえません。あまり魅力的に見えないカナンの文化ですが、当時のイスラエルの民の立場になって考えると少し理解できます。今まで先祖を含めてずっと荒野での生活を続けてきました。移動を繰り返し、文化と言った文化もなく、ヨシュアの時代になってもカナンで戦いばかりでした。もう、いいんじゃないか。カナンの地の人々も怖いし、カナンの文化も魅力的に見える。もう、創造主の命令や創造主に伺いを立てるよりは、自分の安定、自分の平安、自分の快樂、自分の利益を優先し始めた時に、カナンの偶像との妥協、カ

ナンの墮落した文化との妥協が始まったのです。イスラエルの民は再び墮落し始めたました。士師記の1章に記録された「最初は良かったイスラエルの民」は、結局最後のページでは「墮落したイスラエルの民」として記録されることになってしまったのです。

【王がなかった】

士師記の最後、21章25節をもう一度読んでみると、その原因をよく言い当てています。「イスラエルには王がなく、めいめい自分の目に正しいと思う事を行っていたのである」イスラエルの民には王がいなかったのです。これはもちろん、実際に王様がいなかった事も示していますが、イスラエルの民の心の中に、彼らをつかさどる王がいなかったのです。王は支配する存在であり、治める存在です。イスラエルの民の心の中を治めるお方がいなかったのです。いや、いなかったのではなくて、治めてほしいと自分の心を創造主に差し出さなかったのです。代わりに、恐れに心の王様となって頂き、快樂に心を開けわたし、偶像に心を明け渡ししてしまったのです。

【私たちのストーリー】

士師記は、最初は良かったイスラエルの民の墮落を克明に記録しました。リーダーがいなくとも創造主の御心を伺うほどの成熟した信仰の姿を見せていたイスラエルの民でしたが、カナンという目の前にある問題・誘惑と妥協を始めた結果「主の目に正しいと思う事を行わないで、自分の目に正しいと思う事を行って生きてしまいました」しかし、このストーリーは士師記3000年前の

イスラエルの民だけのストーリーでしょうか。私たちには関係のない話でしょうか。

実は、同じ事が私たちの人生にも起こってきます。皆さんも思い起こしてみてください。信仰を持った最初は良かったのに、しばらく時間が経つと、こんなはずではなかったのに、そんな姿で生きている時があると思います。もちろん、信仰生活を重ねるほどに成熟していく部分もあるでしょうが、そうではなく、最初は良かったのに・・・とってしまう時もあると思います。おそらく皆さんも経験があるのではないのでしょうか。私もみなさんと同じです。

今週の後半、「牧師、閉鎖病棟に入院する」という本を読みながら「中毒」が気になって、「中毒」についての映像を見ました。人は心が満たされない時に、何かで心を埋めようとします。それが過度に執着になると、中毒になります。何かを手に入れたい物欲に執着する人は、ショッピングに走りそれで満足する事を繰り返すショッピング中毒になります。性的なもので満たされる事に執着する人は、ポルノを見続けて中毒になる。リアルな人間関係で苦しい人は、ネット上に言いたい放題書き込んで満足するネット上のコミュニケーションの中毒。さまざまなストレスを恋愛で解決しよとする恋愛中毒、アルコールを飲まないと安心できなくなってしまいうアルコール中毒などもあるでしょう。でも、その中毒の結果は、どうでしょうか。そこにあるのは、本当の満足ではなく、罪悪感です。罪の意識にさいなまれます。

そして、思います。最初は良かったのに。なぜここまできてしまったのだろう。

【まとめ】

士師記に記録されたイスラエルも同じだったと思います。ヨシュアが死んだ当初は一所懸命、主を求めていました。しかし、時間が経つ内に、目の前のカナンの状況が見えてくると、心の王座を目の前の恐怖に、快樂に、利益に明け渡してしまいました。そして聖書は「イスラエルには王がなく、めいめい自分の目に正しいと思う事を行ってしまった」と記録しました。

私たちも、どうしてここまできたのかと思う自分の姿があるかもしれません。そして、これからはますます、混乱の時代に突入していきます。「全ての人の価値観が基準になり始めます。また基準がなくなる世界でもあるかもしれません」

でも、そのような混乱の時代だからこそ、私たちの心の王座にもう一度、創造主をお迎えしましょう。創造主の支配を頂きましょう。創造主に人生を預けていきましょう。目の前にカナンのような恐れや不安がやってきたとき、心の中にカナンが与える誘惑や快樂がやってきた時、祈りましょう。

「イエス様、私はすでにあなたのものです。あなたが私の王様です。どうぞ私を支配してください。恐れや不安ではなく、平安を与えてください。誘惑や快樂で満たされるのではなく、あなたの存在で私を満たしてください」

お祈りしましょう。

